

<実践研究>

## 中学校保健体育の教育実習における 授業の教材選択に関する実践的検討

岩田 靖 信州大学学術研究院教育学系  
藤田育郎 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：教育実習，保健体育，教材選択，附属学校と学部の連携

### 1. はじめに

本稿では、信州大学教育学部附属長野中学校における保健体育の3年次教育実習（教育実習Ⅰ）について、2019年度の取り組みを実習生が扱う「教材選択」の視点から検討し、その成果について報告したい。

さて、2018年度、それまで教育実習においてほとんど取り扱ってこなかった「球技」領域の素材を選択し、実習生にその授業づくりについて教材づくりから取り組ませるプロセスをとった。その際、その中心的な素材として選択した「ゴール型」のバスケットボールの場合、実習生にとっても、そして実習を指導する附属教員にとっても「非常に厳しいものであった」との反省が附属の指導教員と学部の教科教育担当教員の間で共有された（岩田・藤田，2019，藤田・岩田，2019）。そして同時に、バスケットボール以外で選択された「ベースボール型」では同様な見解はみられなかったということも確認された（実際、ベースボール型では学部教員が中学校の球技必修段階の子ども[1・2年生]を想定して構成し、中学校現場でも実践例が少なくない修正されたゲーム「ブレイク・ベースボール」を教材として選択し、実習指導が行われた）。

このような認識を背景・契機にして、大きくは3つの問題点の検討の必要性を意識化するようになったと言える。それは以下のような事柄である。

①少なくとも3年次の教育実習は学生にとって、基本的に初めて授業実践を試みるものであって、その際に取り扱う素材、あるいは単元教材の選択は実は極めて重要な問題ではないのかということ。例えばここでの事例で言えば、実際のところ、教職経験のある教師にとってさえ、一般的に「ゴール型」の授業実践には難しさが伴うものであるから、実習生の取り組みにはさらなる困難が積みまとうであろうことが予想されるのは当然である。それは何と言っても子どもや初心者にとってはゴール型のゲームは極めて複雑であるからである。そうであるとすれば、初めての教育実習ではそのことを見通した素材選択や単元教材の選定の視点が不可欠ではないかということ。

②また、学校の体育授業では既成のスポーツ種目を大人のルールや技術水準で子どもたちに提示することはできず、ほぼ常に、学習する子どもの発達段階や類似する運動の既習経験を前提に既存のスポーツの修正・加工が必要になる。いわば「教材づくり」である。

例えば球技種目を念頭に置いた場合、子どもたちに提示するゲームを「単元教材」レベルで「メイン・ゲーム」と通常呼称しているが、真の意味で子どもたちに相応しいメイン・ゲームを構成することは実は容易なことではないのである。ゲームでの学習内容を明確にしながら、子どもたちの学習意欲を喚起しうるゲームを創出することの難しさは、それを一度でも経験したことのある者ならば明瞭に理解できることである。そのゲームが学習者にとって相応しいものでなければ授業の成果はおよそ芳しいものになり得ないのである。その意味で、学習者の実態に精通していない実習生にはその教材づくりは極めてハードルの高いものになる。したがって、良好な学習成果を期待できる可能性の高いことが実践的に確かめられている「既存の教材」の選択が検討される必要があるのではないかということ。

③最後に、教育実習の側面における附属学校と学部との連携のさらなる強化の視点である。これまでも学部の教科の指導法関係の授業内容と附属学校での実習指導の連結を考え、「よい体育授業の条件」に関する講義内容とそれに対応する実際の授業観察法による実習生の授業へのフィードバックなどを取り入れてきているとともに（例えば、「期間記録法」など）、教育実習経験を土台としながら、さらに学部での模擬授業において、特に教師行動のあり方を洗練させていく学習に取り組ませてきた経緯がある。しかしながら、ここで問題とされる「教材」選択に関わった側面での連携の視点は生み出せてはなかったのではないかということ。上記の②との関係で言えば、附属学校の教員と学部教員が「教材」への意識を共有化しながら学生指導・実習指導が可能になる方途の探究である。

そこで、先に指摘した「教材選択」の視点から2019年度の取り組みの概要を記述しつつ、それに関する教育実習生に向けてのアンケート調査、およびそのアンケート項目に関わった附属学校の指導教員の意識・感想を整理し、考察を加えてみたいと考える。過去、保健体育の教育実習に関し、実習生が取り組む「教材」選択の観点からの実践的な研究・報告は極めて少ないと思われることから、今後の教員養成段階の教育学的問題に重要な示唆を提供するものと思われる。

## 2. 2019年度の3年次実習における「教材」選択

2019年度の3年次実習（教育実習Ⅰ）における「教材」選択へ向けて附属教員と学部の「教科の指導法」を担当する教員との間で相互に共通認識が持てたのは大きく以下の2点である。

①その一つは、学生が取り組む授業の対象としての「素材」の領域の問題である。2018年度に取り入れた「球技」領域であるが、その反省点の中心はその下位領域の「ゴール型」の難しさであった。ゴール型は一般的に相手と同じコート内で入り交じりながら対峙し、極めて速いゲーム展開がなされる。それだけでも子どもや初心者にとっては大きな負担であるが、それに加えて次のような難しさが横たわっている。(a)意思決定の契機の多さ(味方、相手、ゴールなどゲーム状況の判断が複雑であること)、(b)空間の流動的な変化(ポ

ールやプレイヤーが動くコート内の空間の意味が刻々と変化すること)、そして(c)行動の自由性(行動の選択肢が数多くあること)である(岩田, 2016, pp.35-36)。したがって、中学生にとっても難しいのは同じであり、その意味で教育実習生による指導は困難を極める可能性が高いのである。上記したように、入り交じりながらのゲーム展開の速さから、指導側が生徒たちの学習様態を見とれずに終わってしまう場合も少なくない。

そこで、2019年度の教育実習では、その下位領域の選択に関し、「ゴール型」から「ネット型」への変更を試みた。「ネット型」にはバレーボールなど自陣でボールを組み立ててプレイすることができる「連携プレイ」タイプと、テニスやバドミントンのようにネット越しにくるボールを直接打ち返す「攻守一体プレイ」タイプがあるが、総じて相手がボールをコントロールできないように攻撃するところに共通の戦術的課題が認められる。

この「ネット型」の種目群も既存のままでは子どもたちにとって易しいものではない。しかしながら、その難しさは特に「ボール操作」に潜んでいる。バレーボールのボール操作技術は初心者にとって極めて高度であるし、ラケットを用いてボール操作することも同様である。したがって、ゲームに求められるボール操作の技能水準を子どもたちに相応しいものに改変することができれば、ネット型のゲームは子どもたちにとって「わかりやすさ」を提供するものになりうる(岩田, 2016, pp.44-46)。

また、プレイ中の行動が「攻守一体プレイ」よりも複雑になる「連携プレイ」のタイプであっても、例えば、「レシーブ→セット→アタック」といった行動は、基本的に時間的経過の中で順次選択されるものであって、ゴール型のような行動の自由性が高いわけではない。そこからすれば、ゲーム中の学習者の様態が、実習生にとってより容易に観察・判断できる対象になり、指導の方向性を明確にして授業づくりに取り組めるであろうと考えた。

②二つ目は実際の教材選択の問題である。今述べたように、「ネット型」のゲームが学習者や実習生に「わかりやすさ」を提供できる可能性があったとしても、特にボール操作の観点からその技能の緩和の必要性があることは確かである。しかしながら、子どもの実態に合わせてゲームを修正し、新たな単元教材(メインゲーム)を生み出すことは実習生にとってはかなりの難度があるのは間違いない。

そこで教材づくり(単元教材づくり=メインゲームづくり)から学生に取り組ませるのは実習生に大きな負担をかける可能性のあること、また実際の授業づくりの成果に影響を与えることなどから、子どもたちの実態を想定して構想されている既に教材化されたゲームを選択する必要があることが確認された。

その際、大いに考慮されたのは、教材化されたゲームについて附属教員が熟知していることであった。そのことによって、授業づくりに取り組む実習生との学習目標、学習内容の理解や単元展開の方向性を議論・共有しながら実習指導が可能になると考えられるからである。したがって、現在、附属長野中学校の実際のカリキュラムに組み込まれているネット型のゲームの単元教材がその候補として吟味された。結論的に選択されたのは(a)「アタック・プレルボール」(ドイツ発祥の「プレルボール」を基に、ネット際でのセット→ア

タックが有効になるように改変されたゲーム)、(b)「ダブルセット・バレーボール」(オーバーハンド・パスによるセット技能の緩和を意図した4回触球制のゲーム)、そして(c)「ダブルバウンド・テニス」(ダブルスの攻守一体プレイ・タイプのゲームで後衛はラケットを持たずに手でボールを捕球し、相手サイドに返球する形式)である。ただし、附属学校のカリキュラムや指導教員の授業担当、および教育実習生の人数の関係から、2018年度にも対象教材として位置づけていた「ベースボール型」の(d)「ブレイク・ベースボール」も継続的に取り上げることにした。このベースボール型教材も附属学校のカリキュラムの中に組み込まれているものである。

2019年度の教育実習生は7名で、(a)から(c)のネット型の単元教材はそれぞれ2人が担当し、残りの1人がベースボール型を受け持つこととした。

なお、これらの単元教材はすべて学部の教員およびその研究協力者との共同によって構成されてきたものであり、既にそれらの概要は外部に公表され、県内外での授業実践例は少なくない(岩田, 2012, 2016)。このような単元教材の選択を試みることから、教育実習の側面における附属学校と学部との連携のさらなる強化の方向に新たな視点が開かれることになった。それは、教育実習生に対し、学部においてその具体的な教材に関わった事前指導を考へることである。つまり、学部教員が中心になって創出した教材を選択することにより、学部において各教材の開発意図やその経過、実際のゲームのイメージについて書籍文献やゲーム映像などの参考資料を提供しつつ、実習生のゲームの実体験などをも含めて、単元目標・授業内容の明確化、またその単元展開の構想に向けた支援が可能になることを意味する。

### 3. 教育実習と教育実習生および指導教員への調査の流れ

#### 3.1 3年次の教育実習の日程

3年次の教育実習は全4週間であるが、それは第1週目と第2～4週目の2つの期間に区分して行われている。

<1週目> 2019年6月24日～28日

<2～4週目> 2019年8月26日～9月18日

1週目、保健体育では、実習生の主活動は「観察」に置かれてはいるが、「保健」分野の授業づくりが各実習生1回担当になっている。そして「体育」分野の運動学習の指導に取り組むのが2～4週の期間である。実習生が指導教員と相談しながら、自分が取り組む単元教材を決定したのは1週目、6月下旬の段階である。

#### 3.2 学部における教科教育担当教員の支援

第1週目終了後、実習生は学部前期の授業を受けつつ、実習2週目以降の準備をすることになる。そこで学生の夏期休業に入る前に教科教育担当教員が以下のような働きかけを行った。

①単元教材に関わる書籍文献、および長野県内の公立中学校で実践された単元教材に関

## 中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する実践的検討

わるゲーム映像を実習生に提供

②ゼミ活動の中でこれらの単元教材に関わる学習会を実施（他のゼミに所属する実習生も参加）

また、2週目が始まる以前の夏期休業中に実習生が自主的に単元教材の学習会を実施する中で、学部の教科教育担当教員も参加し、実際の対象となるゲームの授業実践の前例に関する情報を提示した。

教育実習終了後、9月末までに実習生は附属学校の指導教員に自己の授業実践を中心とした実習レポートを提出している。また、翌10月上旬に指導教員はそのレポートの評価を実施した。

その後、10月中に実習生へのアンケートを配布し、11月上旬までに全員（7名）の回答を得た。また、そのアンケート項目を附属学校の指導教員に提示し、2019年度の教育実習、特に既存の教材化されたゲームを単元教材として用いた実習生の授業実践およびその指導の視点を中心に自由筆記による感想記述を依頼した。

### 4. 教育実習後の実習生の意識

#### 4.1 実習生アンケートの実施項目

教育実習終了後、実習生に回答を求めたアンケートの内容は以下の通りであり、①授業づくりの準備について、②書籍文献・ゲーム映像・ゲームの実体験等について、③指導教員とのコミュニケーションについて、④子どもたちのゲーム様相の変化について、そして、⑤修正されたゲームでの取り組みについての項目を取り上げている。

#### 附属長野中学校・教育実習Ⅰ（3年次） 受講学生へのアンケート

これまでの教育実習の中で、実際の生徒たちの体育授業における実態について、実習生が事前に十分理解しておくことが難しいため、実習生が構想する教材の難度が生徒たちの実態を超えて高くなる傾向があるという反省、またそれと同時に、「初めての教育実習」で実習生が生徒たちに適合した教材を考えるとところからスタートするのは実習の負担度が大きいのではないかの考えを附属長野中学校の先生方と共有してきました。

そのため、今年度の教育実習Ⅰでは、「球技」領域における既存の種目を生徒たちの学習能力や学習経験を踏まえて修正したゲーム（「アタック・プレルボール」「ダブルセット・バレーボール」「ダブルバウンド・テニス」「ブレイク・ベースボール」）を単元教材として授業実践に取り組んでもらいました。

○以下の質問に自由記述で答えて下さい。

1. 特に、実習第2週目以降（8月下旬から）の実際の授業づくりに向けてどのような準備ができました

たか。

2. 教材（担当したゲーム）の開発経緯（なぜこのような教材を創ったか）や授業実践例についての書籍文献、ゲームのモデル的な映像、ゲームの実体験（事前に大学等でゲームを実際に試し、経験してみたこと）などは、単元の中での指導内容やその展開を考える上で役立ちましたか。役立ったとしたら、どのような点で有効であったでしょうか。
3. 今回取り組んでもらった教材は、実習指導をされた先生方にとっても実際に附属中学校のカリキュラムの中で授業されているものがほとんどです。したがって、指導の先生方もよく熟知されているものでした。その意味で、先生方と単元の終末の子どもの姿（ゲームのできばえや学習活動の姿）を実習生と共有しながら授業づくりについてコミュニケーションができる可能性が高かったと考えられます。この点に関し、実習生の立場からはどうだったでしょうか。
4. 単元の中で、あなたの授業での働きかけを通して、生徒たちのゲームの様相が高まっていくことを感じられましたか。
5. 最後に、修正されたゲームによって単元の授業実践を試みたことについて、全体的な、あるいは個別具体的な感想を記述してみてください。

#### 4.2 実習生アンケートの結果および考察

実習生アンケートの結果は以下に示すところとなった。項目ごとに若干の考察を加えておきたい。なお、回答において指し示している実習生、A・B生は「アタック・プレルボール」、C・D生は「ダブルセット・バレーボール」、E・F生が「ダブルバウンド・テニス」、そしてG生が「ブレイク・ベースボール」を単元教材として実習の授業に取り組んでいる。

##### ①授業づくりの準備について

- (A生) 学部のα先生からいただいた資料を参考に、実習生と話し合い、準備をした。また附属中の先生方から指導していただいたことを取り入れた。
- (B生) 実習生で集まり、実際にプレイするなどして教材のポイントなどを研究し、どのような練習方法があるかなど考え、単元構想ができた。
- (C生) 学部のα先生の著書を読み込み、実際に「ダブルセット・バレーボール」を行い、子どもたちがつまずきそうなポイントを確認し、単元計画を作成した。1・2回目の附属の先生が行う授業の様子を見て、子どもたちの技能や反省等を参考に指導案を作成した。
- (D生) 実際に教育実習生で教材を試し、教えるポイントや楽しいところを発見した。第1週で一回授業を見る時間があつたことが、生徒の実態を見て授業づくりに生かした。α先生の書かれた本を読み、気づかせるポイントを予めおさえ、指導案に生かした。
- (E生) 同じく「ダブルバウンド・テニス」を教育実習で扱うF生と教材を知るために、体育館で実際にやってみて教材理解をはかった。その際、参考にした本が『ボール運動の教材を創る』である。攻守一体プレイのあり方とoff-the-ballの行動のあり方を理解し、単元展開と8回分の

## 中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する実践的検討

指導案の原案を準備した。

- (F 生) 事前に単元教材がわかっていたため、『ボール運動の教材を創る』を参考におさえるべきポイントを理解したり、附属中実習生で集まり、教材研究を行うことができた。
- (G 生) 「ブレイク・ベースボール」は、ランナーの進塁が早いか、守備側の連携が早いかを特定の塁上で競うことに加えて、状況に応じてブレイクを諦めて、ストップに切り替えるなどの判断が多く、複雑なので、どうしたら状況を判断して連携した守備ができるようになるか考えて、単元展開を組み立てた。

総じて、事前に自分の取り組む単元教材を基にして授業づくりの準備を進められたことが記述されている。とりわけ単元構想を行うための方法的な見通しを得ながら、主体的でありつつ、他の実習生との協同的な作業が行われたことが推察できる。

### ②書籍文献・ゲーム映像・ゲームの実体験等について

- (A 生) 教材に取り組む際につまずくポイントを把握することができた。また、指導する際にどのように声をかけ、練習に取り組むように促すか学ぶことができた。『体育の教材を創る』『ボール運動の教材を創る』の本は授業づくりにおいて非常に参考になった。特に、授業の展開づくりで。
- (B 生) ゲームを実際にやってみることで、レシーブをどこに集めるか、セットはどうすれば打ちやすいかなどポイントをつかむことができ指導しやすかった。
- (C 生) 役立った。教材の開発経緯を知ることで、「ダブルセット・バレーボール」のポイントやねらいを把握することができた。そのため、単元を通して、子どもたちに何をさせたいのかをおさえながら授業を考えることができた。ゲームの映像は、自分や子どもたちが教材のイメージをもつのに役立った。ゲームの実体験から、何が難しいかを身をもって感じられ、そのため改善方法を考えられた。授業中の子どもたちのつまずきの予想やその後の授業展開を考えるのに役立った。
- (D 生) 自分たちで試して経験することで、初めて行ったときのつまずきや、改善を促す声かけを考えるのに役立った。つまずくポイントを多くみつけることで、実際の授業でどう対応するとよいか準備ができた。ゲームのモデル映像があることで、中学生の最終形態を見ることができ、その姿に近づかせるには何が足りないか、どう教えたら効果的か確認できた。ルールが書籍に書かれていることで、指導の際もルール確認がすぐできて役立った。
- (E 生) 役立ちました。ゲームの実体験を行ったことで、「ダブルバウンド・テニス」の醍醐味の、いかに「ノータッチ・ボレー」を決めるかに気づくことができた。そして、ボレー・チャンスを理解すること（前衛は左サイドが弱点だが、相手後衛の立ち位置や配給によって左サイドを守らなくてよいとき）が、攻守一体プレイの実現に必要なだとわかった。また、単元展開は授業実践例が参考になり、どのような流れで子どもたちに落としこんでいくかを考えるヒントとなった。

- (F 生) 『ボール運動の教材を創る』を読んだことで、子どもたちに気付かせるべき点（具体的には「左を抜かれない」「積極的にボレーを狙う」）や、単元展開の基本的な流れを理解することができたため、教材の核となる部分はぶれずに授業を行うことができたと思う。
- (G 生) 開発経緯を知ったことで、教材のねらいや生徒のつまづきを予想して単元展開を考えることができた。また、事前に実際にゲームを体験することで、運動の課題や予想されるつまづき、ルールなども理解できた。

このような実習生の記述から、教科教育担当教員が提供した書籍文献やゲーム映像が実習生にとって単元構想における授業の「ゴール・イメージ」（単元終末の姿）を描き出すのに貢献したと言えるであろう。またさらに実習生が対象となるゲームを実際に体験してみたことは、そこでの技能的・戦術的問題を探り、子どもたちにどのように働きかけていく必要があるかを考えていく上で、かなり重要な役割を果たしたと考えられる。

### ③指導教員とのコミュニケーションについて

- (A 生) 指導の先生方の意見や考えを私の授業に取り入れなかったら、うまく授業は進行せず、内容も一貫性のないものになっていたと考える。実習生と先生方は教材を熟知していたため、授業のゴールに向けた方向性を決めやすく、話しやすかった。
- (B 生) 指導の先生方の教材についての理解がとても深かったため、アドバイスをたくさんしていただけて、話し合いながら授業づくりをしていくことができてよかった。
- (C 生) 私の担当の指導の先生は、とてもよく私の意図をくみ取り、色々とアドバイスを下さったり、子どもたちの姿から次時の授業展開をどうするか話し合っただけで授業づくりをしてくれた。私はα先生の本を参考にしていたので、その本からの話がスムーズに通じたのは授業が考えやすかった。
- (D 生) 授業を組み立てる順番に関しては方向が同じだったので、授業内容や指導方法での話し合いに時間を使うことができ、とても進めやすかった。しかし、授業の途中で方向性が変わってしまい、ポイント（Tゾーンなど）を抑えられないところもでてきて、先生によって理解度が異なり、私もどこまで自分の考えで進めてよいかわからず修正が難しかった。
- (E 生) 教材理解についての食い違いがあったように感じられた。単元の前半を指導の先生がやられて、後半から私が担当したが、前半部分でシングルのゲームに特化しすぎていたため（ネットが極端に低く設定されていたり）、点の取り方に後衛の返球に依存する癖がついてしまっていたようだった。単元の序盤で、この単元の着地点が定められていると、よりスムーズに授業が進められたのではないかと思った。
- (F 生) 先生方も並行して他のクラスで同じ単元を持っていたため、常に先生が授業をする視線で親身に話し合っただけで、より子どもたちに合った授業をするための実践的アドバイスをもらいながら授業づくりができたため、良い環境で学ぶことができたと思う。



(G 生) 指導の先生が別のクラスで「ブレイク・ベースボール」を担当していたので、先生が担当しているクラスの子どもの姿と、自分が担当しているクラスの子どもの姿とを比較して、次の授業をどうしていくか、話し合いながら単元を進めていくことができたので、実習生の中では自分一人が「ブレイク・ベースボール」を担当していたが、特に困ることはなかった。

およそ実習生と指導教員があらかじめ設定された単元教材について理解し合いながら授業づくりの指導－被指導関係が構築されたのではないかと推察できる。その一つは、先にも指摘した単元終末のゴール・イメージについて、共有された方向性を見出せたことが大きいであろう。したがって、指導教員による支援・示唆が実習生によりよく理解された可能性が高いものと考えられる。確かに、実習生の記述の一部には、指導教員との教材理解に関する認識のズレが存在したことが表明されてはいるものの、実習生自身が既存のスポーツ種目から単元教材を創り出した場合の指導教員との考え方の乖離に比較すれば、その隔たりは小さいものであったのではないかと想像する。

また、ここでの一部の記述によれば、同じゲーム教材を用いた附属教員による授業が並行して実習生の観察対象になりえていたことが大きなプラスの影響を及ぼしていたことは間違いない。そのことは上記の F・G 生のコメントから明らかであろう。

#### ④子どもたちのゲーム様相の変化について

- (A 生) 強く感じた。私の授業では、強いアタックを打ち、得点すると決め、レシーブ、セット、アタックを段階的に練習した。授業を重ねるごとに各技術やチーム内の連携が高まっていると感じた。さらに、ゴールと定めた強いアタックを打ち、得点することができる生徒が増えた印象である。
- (B 生) とても感じた。教師の働きかけが生徒の中に落とし込んでいるかが、ゲームを見るととてもよくわかった。
- (C 生) 感じられた。アタックが強くなっていった他、子どもたちのグループでの作戦会議の内容や振り返りなどが、最初は授業内容をやってどうだったというものから、後半にかけて自分たちの考えなども含まれてきて、各グループによって戦術が工夫されていくのを感じることができた。
- (D 生) 相談しやすい関係性を築くことで、チームのミーティングに入りやすい雰囲気にするのができ、話し合いをより効果的なものにし、ゲーム様相が高まったように感じた。
- (E 生) ノータッチ・ボレーの魅力や面白さを子どもたちに還元していく中で、後衛の配球のバリエーションが増して、理想のコート状況をつくり出してチャンスをつくろうとしている場面が多くみられるようになった。また、投げるのが苦手な生徒には個人的な机間指導に入ったことで、次第に強く鋭い送球が増えていったように思う。
- (F 生) 前衛のボレー・チャンスの判断材料として、左を守らなくてよい時と、甘い球が返球されて

きそうな時が少しずつ根付いていたため、最後には後衛の配球により相手を動かし、チャンスと判断すると積極的にボレーを狙っている姿がみられた。

(G 生) チーム毎に必要な練習を考えて行うようにしてから、試合でも、中継プレイやバックアップ、ベースカバーの役割行動ができるようになり、チーム内で指示の声も増え、ゲームの様相の高まりを感じる事ができた。

ここにみる実習生の記述から、単元教材としての「ネット型」を中心とした選択、および子どもたちの能力段階を想定した既存の単元教材の選択が大いに意味を成すものであったと解釈できる。なぜなら、実習生にとって自らの授業での働きかけが子どもたちの学習の様相にプラスの変化を与えられているという実感を得させているからである。実習生は直接比較することは不可能であるが、昨年のゴール型（バスケットボール）の選択とはこの点、大きな差異を生み出していたであろうと思われる。それは選択された単元教材が要求する技能・戦術能水準が、単元の中で子どもたちの向上を保障しうるものであると同時に、ネット型における子どもたちのプレイの様態やその変化が実習生にとって観察しやすく、また実態に合わせて子どもたちに働き返ししやすいものであったと考えられるからである。

#### ⑤修正されたゲームでの取り組みについて

(A 生) 生徒の気持ちになることをテーマに授業実践を試みた。どのような内容だとやる気を出すのか、また、なぜつまずきから抜け出せないかなど、多くのことを考えた。結果的に最後まで分からないこともあったが、生徒の気持ちになることで良い授業を創れたと思う。

(B 生) 修正されたゲームは中学生の実態にとっても適合していて、単元を進めやすかったと感じた。簡易化されたゲームだからこそ、ゲームの様相も単元を進める中で変わりやすく、実習生に力がつくと思った。

(C 生) バレーボールに比べ、難易度が下がることや、4人が必ず1回ずつ触球するルールであったため、ボールに一度も触らない子はおらず、全員が参加できるのはよいと思った。ただ、ローテーションをしても役割が変わらず、ずっとアタック、もしくはずっとレシーブなどの子が何人かみられたので、ボール操作をバランスよくできるような工夫を考えたい。難易度が下がるため、ゲームはとて盛りが上がったが、中2でダブルセット・バレーボール、中3でバレーボールでも良いような気がする。強いアタックがどんどんできてきて、少し危険も感じ、難易度を上げて良いとも思った。

(D 生) 場面ごとのきわどいルール判定が難しかった。また、フォーメーションで触球順を決めていたが、チームによってはその子の役割を固定してしまっているところもあり、チームの作戦と捉えるべきか悩んだ（授業としては全員がいろんな役割を経験することを望む）。コートが3面しかなかったため、8チーム編成だと6チームしかコートに入ることができず、2チームの

運動従事時間が減ってしまう。セッターの役割を簡単にしたゲームであることで、取り組みやすさはとても高まったと感じた。

(E 生) 「ダブルバウンド・テニス」は、比較的扱いやすく、手ごろな教材としてネット型の攻守一体プレイを楽しみ、学習するのに適していると感じた。生徒からも「楽しい」「どんどん面白くなった」「もっとゲームをしたい」など評判もよかった。ゲームの質を安定させるためにも、ボールの空気圧やラケットの状態はこまめにチェックする必要があると思った。

(F 生) 修正されたゲームであるため、ある程度、技能面の難易度が下がっていることにより、戦術的思考を持ちやすかったのではないと思う。ただ、戦術的な面白さに触れさせてあげられるタイミングが単元の後半になってしまったため、もう少し早い段階でそこまで引き上げられるような指導が必要だと感じた。

(G 生) 50分と限られた時間の中で、ゲームの時間(イニング数)と運動量を確保することが難しかった。女子生徒を中心にベースボール型をする上で必要な、捕る、投げる、打つなどの基礎的スキルが不足していて、連携が上手くいっているのにミスをしてしまう場面が目立った。

ここでの回答の中には、修正されたゲームへの取り組みに直接関わらない内容もみられるが、B・C・D・E・F 生などからは肯定的な反応が読み取れるものと思われる。この中で、もともとのスポーツ種目を子どもたちの能力段階、つまり実態に合わせながら修正された単元教材の意味が、例えば E 生のように子どもたちのゲームへ向かう意欲の側面から理解されたり、B 生の指摘するように子どもたちの学習の進展の読み取りとして表現されたりしたことは非常に重要であろう。この点に関しては、上記④の質問項目への回答と併せて解釈することもできよう。

## 5. 教育実習後の指導教員の意識

それでは指導教員は 2019 年度の教材選択をどのように評価したのであろうか。以下に実際に実習指導に当たった 3 人の教員の記述を取り上げることにしたい。

### 【A 教諭】

- 既存の教材を実習生が知ってもらうことで、教材の開発意図を共有しながら授業準備が行えた。
- 夏休み中に単元展開を考えてもらったが、附属中の単元展開とのズレを感じた。実習生の計画では、単元前半に個人技能を高め、単元後半にゲームを行う計画だったため、本時案を作成する前に、単元の構想について打ち合わせる必要があった。実習生の準備してきた内容を十分に反映できなかつたと感じる。夏休みに入る前に単元展開の例を示すか単元展開を共に考えるところから共に教材化していく必要があった。
- 実習生同士で教材研究を考えられていた。一人だけ題材が違う実習生には、悩みを共有できる人

がいなかったことが反省として残っている。

- 教材についての理解が指導者として曖昧であったため、実習を指導する側として更に熟知してから指導にあたる必要がある。

#### 【B 教諭】

- 既存の教材を行うことを伝えていたため、実習生が教材を理解したうえで、2週目の実習に臨んでいたと感じた（中には、単元すべての指導案を書いていた実習生もいた）。2週目までの間に、大学で指導していただいたり、教材を自分たちで試したりしていたため、教材についての指導（なぜボール操作が簡易化されているかなどではなく、実際の授業での指導や単元の流れなど授業にかかわる部分の指導に時間をかけることができた。
- はじめのうち課題をボール操作の向上で解決しようと考えていた実習生も、指導を受けたり実際に授業を行ったり中で、多くの実習生が、ボール操作ではなく、ボールを持たないときの動きに目を向けて、単元を考えることができていたと感じる。
- 昨年度は、ゴール型（2・3年バスケットボール）を行った。攻守が入り乱れるため、実習生は、本時の課題が達成できていたか、生徒の技能が伸びていたか、意図した攻撃ができていたかなど、生徒の姿からみとることが難しかった。また、どのような単元の流れにすればよいのか、次にどのような課題を据えればよいのか迷っていた様子が見られた。今年度は、ネット型（1～3年）とベースボール型（3年）の授業を担当した。そのため、授業を重ねる中で、実習生も生徒の技能の伸びや課題を見取ることが徐々にできるようになってきた。
- ネット型とベースボール型の教材を担当したため、課題と生徒の動きの変容を重ねて考えられていた様子が見られた。授業実践を重ねる中で、練習やゲームの際に、生徒に適切なアドバイスをしたり、課題を意識させるような声掛けをしたりできるようになった。
- 教科指導の時間が限られている中、実習生と教材について共通理解が図られていたため、どのような課題を据えるのか、導入はどうするのかなど、1時間の授業の具体についての指導に時間をかけることができた。

#### 【C 教諭】

- 教材（アタック・プレル/ダブルバウンド・テニス/ダブルセット・バレー）を扱う価値
  - ・実習生と教員の間で、生徒に味わって欲しい楽しさの世界を共有することができた。
  - ・教員が担当した単元の前半（導入）において、生徒の実態を共有することができた。
  - ・上記のゴール・イメージと実態とのズレから、単元を構想することができた。
  - ・単元の構想から、各時間の中心的な学習内容を明確にすることができた。
  - ・各時間の学習内容のつながりが共有できない場合には、教員が担当している他学級の授業を参観してもらい、実際の授業を通して合意形成を図ることができた。
  - ・同時に進行している他学級の参観が可能であったことで、ゲーム様相などの違いを比較すること

ができた。その違いから、実習生が相互作用の大切さや、振り返りの大切さ、教える部分と生徒が試行錯誤する部分の違いなど「指導案づくり」以外にも目を向けることができた。

- 多くの実習生が同じ「型」の球技を実践したことの価値
  - ・授業の流れなど共有できる部分が多かった。
  - ・共通点が多いため、短い教科指導の時間を有効に使うことができた（学習内容にも共通する部分が多く、また、相互作用のタイミングなども似ていたため、複数人同時の指導が可能であった）。
  - ・「期間記録」など実習生同士の授業を比較できる部分が多く、一人一人が課題を明確にして毎時間の授業実践に向かうことができた。
  - ・場合によっては負担にもなってしまう参観の時間が目的意識をもった参観になっていた。こちらが声を掛けなくても（参観の時間になっていなくても）、自分の授業に生かす材料を見つけるために、自主的に参観する実習生の姿が多く見られた。

指導教員の今回の取り組みへの中心的な印象は、単元教材を実習生と共有して実習指導に臨めたことへの肯定的側面であろう。単元構想（単元の展開）、学習内容の抽出などに関わる指導が、実習生との相互作用の中で、かなりスムーズに進められたことが窺われる。そこでは、単元教材に関する理解や学習の進め方についての見通しにおいて実習生と指導教員の認識の違いは実際には多々表面化するであろうし、差異があるからこそ指導－被指導の関係性が生まれるのであり、その大前提として共有化された単元教材の存在が生産的な相互のコミュニケーションを生み出し得たのではないかと推察される。

なかでも第2週以降の体育分野の運動学習指導における実習生の準備が重要であったことが記述されている。実習生が単元教材について一定の理解をもって授業づくりに取り組むからこそ、附属教員の指導が実習生により深い影響力を持ちうる可能性を拡大しているものと考えられる。おそらく単元教材づくりを実習生の課題とすれば、それについての基本的な考え方を指導教員とすり合わせることに多大な時間を費やすことになることは容易に想像できる。

## 6. おわりに

信州大学教育学部附属長野中学校・保健体育科における教育実習Ⅰ（3年次）の「教材選択」に視点を当てて2019年度の取り組みを取り上げ、実習の概要を説明した。また、実習生、指導教員の実習後の感想に関するアンケートおよび自由筆記の結果を提示し、若干の考察を行った。

やはりここでは2019年の教材選択を附属教員と学部教員とで合意したことのよさがそのまま評価されたと言えるのではなかろうか。まずは、第1に、2018年度の反省点になった「ゴール型」よりも「ネット型」中心に教材選択したことには予想通りのメリットが存在していたといつてよいであろう。特に、2018年から継続的に教育実習指導に当たられ

た B 教諭からはそのことが大いに指摘されている。学習場面での子どもの変化や向上を読み取りやすく、次の指導にその情報を生かしていけるところが「素材」領域の運動特性の違いに視点を当てた結果であろう。

第 2 に、「素材」からの教材づくりを実習生に課題化するのではなく、子どもの実態を配慮し、既に一定程度の授業成果が期待できることが確認されている既存の単元教材を実習対象にしたことよさである。特に、その単元教材が学部教員によって構成されたものであり、なおかつ附属学校のカリキュラムに組み込まれているものであることが重要であろう。そのことによって実習生の単元構成－授業づくりの実際において子どもの実態との乖離を少なくするだけでなく、実習生－附属教員－学部教員が単元教材の選択の仕方を通して結びついていく可能性を大きく開き得るからである。

そして、第 3 に、学部教員が実習の事前指導を意味あるものに行うことができることである。特に、学部教員が創出した具体的な教材選択を通して、実習生の単元構成や毎時の授業づくりの準備を促進させることができることが非常に重要であろう。実習生および指導教員の感想の中にこのことよさに関する記述は如実に表れている。これは教育実習における附属学校と学部との連携強化の大きな一側面であると評価できるであろう。

#### 文献

岩田靖 (2012) 体育の教材を創る－運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて, 大修館書店

岩田靖 (2016) ボール運動の教材を創る－ゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探究, 大修館書店

岩田靖・藤田育郎 (2019) 中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する一考察, 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要・教育実践研究, 18, 139-148

藤田育郎・岩田靖 (2019) 保健体育科教育実習の充実に向けた取り組みの成果と課題－学部と附属学校の連携・協同の在り方, 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要・教育実践研究, 18, 149-158

#### 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP17K01632 の助成を受けて実施したものである。

(2020年 1月15日 受付)

(2020年 3月13日 受理)